

現代アメリカ口語英語の言語思想史的語法の諸相

後藤 弘 樹

人は社会生活を営む上で、日々行き違いのないよう自分と関わる人たちとの間の意思疎通を円滑に進めることが何にもまして重要である。その最も大きな原動力となるものは、生かすも殺すも言葉そのものであり、言葉の持つ力強い表現力である。話し手は如何にすれば聞き手の注意を引きつけ、最小の努力で最も効果的に話し手の思いや喜怒哀楽を含めた感情を如実に伝たいと願う心理的伝達作用が、たとえ時代が変わっても、何時の世も最大の関心事となる。小西友七氏は『アメリカ英語の語法』(90ページ)でこれを言語的節儉 (linguistic economy) と呼んでいる。そのため人は古来より修辞学的に表現力や話術力を磨き、常に創意工夫をしてデリケートな心の動きを間違いなく、正しく聴き取ってもらえるように精一杯の努力をする。たとえその方法や手段が時代と共に変幻自在に少々姿を変えていく中であっても、相手に話し手の意思や話の筋や内容を誤解なく、的確、明確に伝えるためには努めて説得力のある力強い表現力が織りなす語法や話術力でもって誠心誠意訴えようと心がける。そこで本稿では言語思想史の観点からその言葉の持つ表現力の逞しさの一端を英米の文学作品から用例を例示して実証的に論じることとする。

はじめに

言葉 (language) は人が社会生活をする上で意思疎通をはかるためのかけがえのない人間の伝達手段の道具であって、大別して話し言葉 (spoken language) と書き言葉 (written language) に分けることが出来る。人々の折々の思考や喜怒哀楽を含めた感情の起伏などを事細かく音声を伴って相手に伝える伝達手段が話し言葉、即ち、発話行為 (speech) であり、それを言語伝達表現手段として文字に書留て書き表したものが書き言葉 (written language, literary language) である。言うまでもないが古来より人間の文化や社会はその言葉が育む土台の上に成り立っているのである。人が社会生活を営む上で意思の疎通をはかるために交わす言葉が発話となって口から発せられる時に初めて、生き生きとした感情がこもった、躍動感溢れる生命の息吹が吹き込まれる。人は常にその言葉に彩られ、一喜一憂して社会や文化を前進させるための1つの重要なエネルギー (原動力) となる。ここで大切なことは、社会で言葉が会話として成立するためには常に話し手と聞き手の存在があって、両

者はそれぞれにコミュニケーションという重要な役割を担う。言うまでもないが、言語思想史の観点からお互いに誤解のない円滑なコミュニケーションをはかるためには、心理的な面は言うに及ばず、語法上の面から言っても、言葉は常に明確に、簡潔に、わかりやく、しかも端的に表現することが何にもまして重要である。人は時代が変わっても、自己の主義主張や話の筋や内容、その折々の喜怒哀楽を間違いなく相手にはっきりと理解し、聞きとってもらうためには意識的、無意識的に拘らず、常に切磋琢磨、実にさまざまな工夫と努力を古来より積み重ねてきている。そうして、口語表現上、意思の疎通（コミュニケーション）をはかる上で最も大切なことは、最小の発話努力で最大の表現効果を聞き手に与えるための努力と創意工夫である。即ち、換言すれば、それに伴って生み出された実行力のある機能的な伝達表現手段こそが、小西友七氏の言う言語的節儉（linguistic economy）であり、これが極めて言葉の表現上重要な役割を果たすことになる。本稿ではこれらの点に的を絞って、文字の上書き表された現代アメリカ口語英語表現の有りにていを言語思想史の観点から文学作品の用例を通して実証的に述べることにする。

1. 強意的な否定語 “no”

アメリカの口語英語では、聞き手に誤解のないようにはっきりと否定する場合に “not” の代わりに “no” がよく使われる。例えば、小西友七編『現代英語語法辞典』、761ページによると、「There isn't a wardrobe in the bathroom! よりも There's **no** wardrobe in the bathroom! のほうが強意的で、総じて否定を強めたいときに “not” よりも “no” のほうが用いられる」との記述がある。否定したい文意の趣旨を的確に相手にはっきりと伝えるためには、また陳述全体そのものを否定する際には “not” よりも “no” の方が一目瞭然、鮮明で、しかも意味合いが強く、好まれるのである。貴志謙二訳『カム英文法』、166ページにも「最も一般的な文副詞の1つは否定語 not である。さらに古い否定語 no がある。これは、完全否定文の力をもった答えに、今なおきまって用いられている」と、記されている。更に大塚高信編『英語慣用法辞典』、742ページにも、「形容詞 no は陳述全体を否定するのが原則である」と記述されている。

一般に must (shall; should) not (do); ought not (to do); do not~の意を表現する場合に、文頭におく “No” 一語でもって簡明的確に不可という表示や禁止、取り締りの表現がいつも簡単に可能となる。これについては井上義昌編『英米語用法辞典』、802ページに説明されているように、特に「掲示文などでは通例 No~という省略形が用いられるが、これは元々 “No~” の前にあるべき “There is” または “Let there be” などが省略されたものである。Let there be no + Noun」は「……してはならない」という意味であると、行き届いた親切な説明がされている。

このように看板や掲示物などに見られる“No”を文頭につけた表記の仕方は、勿論、警告文としてはそれ自体“*There is~*”や“*Let there be~*”などで書き始めるよりも重々しく威厳があり、また文としての体裁のおさまりも良く、整っている。換言すれば、本来あった文頭の“*There is~*”や“*Let there be~*”などは警告文(掲示文)の体裁をとるために、即ち、掲示文の表記を最大限生かして趣旨説明を強調(Emphasis)するためにあえて省略されたものである。その理由は一方的にこちら側のメッセージを発信するだけで、相手とのコミュニケーションをはかることを必要としない、言い換えれば、それ自体話のやり取りを目的としない手法、手段であるからである。即ち、言語思想史の上から端的に言えば、そもそもこの表記の仕方の根底に付随してここに内在する思想と哲学は、言うならば、最小の努力で最大の伝達表現効果、即ち、発話行為の最良、最高、最大の成果をあげることに集約されるのである。更に、言葉を換えて言えば、一貫して言語的節儉(linguistic economy)に根ざしていると言っても過言でない。従って、ここから読み取れるものは、もし従わなければ必ず不利益を被ることになるぞといった全く選択肢のない、一種の脅しともとれる脅迫的文言もどきと見間違ふほどの鋭い語気が感じられる、いやそれに近い表現であると感受性の強い敏感な人なら肌で感じ取ること必死であると思われる。従って、ここには相手を思いやる血の通った人間的暖かみのあるニュアンス(nuance)は微塵も感じられないのは言うに及ばず、いかにも事務的、機械的そのもので、いささかも微妙な複雑な人間感情が入り込む余地は皆無なのである。いわば、問答無用(No argument!)の荒っぽいやり方で、ここから感じ取れるのは、それを見たり、聞いたりした人の側に「何故……?」「どうして……?」などという素朴な疑問に答えてくれる術すら一切示されていないばかりか、ましてやそれに対していささかでも選択をすることが出来る余地すら全く残されていない、いわば、有無を言わずに屈服させ、従わせる手厳しい語気の荒さがにじみ出た表現そのものという印象を与える表記の仕方である。従って、取りまく微妙な人間感情とは一切無縁で、人により、場合によっては高飛車で、傲慢的ともとれる、或いは人の感情を逆なでするような文頭につけた“*No~*”「~するべからず」という高圧的な一語は、好むと好まざるとに拘らず一方的に例外なく、こぞって否定や禁止や警告などの趣意を押しつける、いや明示する、伝達手段として、ある意味では、遺憾なくその力を発揮している。即ち、何はさておき、実はそれが“*No~*”で始まるこの掲示看板の表記の仕方の最大の持ち味であり、ねらいなのである。

今日これを端的に示しているのは標識や掲示看板などに見られる文頭につけた“*No~*”という力強い反面、威圧的な文言である。ここから見え隠れするのは一刀両断問答無用の命令的口調であり、高圧的な姿勢そのものである。従って、この表記方法は視聴者にそれに付随した詳しい親切な理由や補足説明などを全く必要としない、いやそれさえ許さない看板や掲示物などの表記に適していて、好んで用いられている。しかし、場合によっては人を深く

傷つける恐れのあるこのような文頭に“*No*”で始まる言語表記は見る人によっては、いわばぐさっと胸に突き刺さる研ぎすまされた鋭利な刃にも等しい武器ともなりうる恐れがあるが、今日そのようなこととは全くお構いなしに機械的、事務的に一切の伝言や指示を一方的に伝える言語表記手段や方法として、広く標識や掲示看板などに専ら好んで用いられている。ここでその概要の一端を明示するために、身近な使用例をいくつか挙げることにする。

No admittance except on business 「無用の者はいるべからず」

No browsing 「立ち読みお断り」

No credit given 「貸し売りお断り」

No Entry 「立ち入り禁止」

No littering 「ゴミ捨て禁止」

No flowers 「供花（献花）の儀堅くご辞退申し上げます（葬儀、告別式の際の）」

No parking 「駐車禁止」

No pets 「ペット不可」

No peddlers or salesmen 「押し売りお断り」

No scribbling ; No graffiti 「落書きするべからず」

No smoking 「禁煙」

No swimming today 「本日遊泳禁止」

No thoroughfare 「通行止め」

No through road 「通り抜け禁止」

No trespassing 「立ち入り禁止」

No U turn 「Uターン禁止」

No Unauthorized Entry 「関係者以外立ち入り禁止」

No visitors 「面会謝絶」などの掲示看板や標識

また文の形式としては、

There is no room for consideration. 「考慮の余地なし」

などに見られるような趣意は的確、明瞭ではあるが、そこには如何なる人間感情も入り込む余地のない暖かみのない、思いやりのない、時には冷酷とさえ思われるほどの厳しい指示や表示をした掲示看板のいくつかをひょっとしてどこかで目にしたご記憶のある方もきっと多いことと思う。

また親が子供に有無を言わず、しかりつけ、従わせる次のような表現もこの部類に属する典型的な例である。例えば、

No talk back! (= Don't talk back to your parents! 「親に口答えするんじゃない!」)

No doodling on the valuable book! 「大切な本にいたずら書きをしてはいけない!」

その他に下記の用例はいずれも、文頭に来る“no”で始まる命令文ではないが“not”よりも強調的である。小西友七編『現代英語語法辞典』, 761ページに「総じて“no”は“not a/any”より強意的で否定を強めたいときに用いる」と述べられている。

There were **no** letters for you this morning. ——小西友七編『現代英語語法辞典』

There was **no** answer. —— *Ibid.*

She is **no** taller than her sister. —— *Ibid.*

There is **no** denying the fact. ——大塚高信編『新英文法辞典』

My wife is **no** different from any other women in this respect, and last spring she decided to buy her “one nice thing” at Chanel’s. —— Art Buchwald, *One Nice Thing*.

2. “Where～ to? ; where～from? ; where～ at?”

疑問副詞は本来副詞であるから前置詞がつくことがまずないはずだが、口語、俗語、方言では不要の前置詞“to”や“from”や“at”がつくことがある。疑問詞“where”の後に“to”や“from”や“at”をつけるのは、聞き手に「どこへ～?」、「どこから～?」、「どこに～?」と、こと細かく来た方向や行き先や場所に特に関心があって、明確に知りたいと願う心理的な強い意図や願望からでた余剰語法で、従ってある意味では強意表現語法であるということが出来る。これについて小西友七氏は『アメリカ英語の語法』, 91ページの中で「ここで冗漫という時、われわれは単になくてもすませる、むだな、余計な表現だと思いがちである。もちろん、そうした場合もあるが、しかし、多くの場合、より明示的であり、かつそこに何かエネルギーが感じられ、余情的というか一種の強調的な効果を果たしているように思われる」と述べている。

“Traveling! **Where to?**” demanded the doctor, glaring at him over his spectacles.

—— Rose Terry Cooke, *Huckleberries Gathered from New England Hills*.

“**Where** you going to?” Emery said.

—— Maristan Chapman, *The Happy Mountain*.

Where you goin' t' git that twelve hundred from?

—— Sidney Howard, *Ned McCobb's Daughter*.

He looked at all three of us in a queer sort of way. "**Where am I at?**"

—— Erskine Caldwell, *The Time Handsome Brown Ran Away*.

3. "look like" (= look as if, look as though)

アメリカの口語英語では類似性の概念を表す "look as if" や "look as though" に代わってより簡単な簡略化された "look like" (～のように見える, ～のようだ) がよく用いられる。例えば、「雨が降りそうだ」は, "It looks like rain." であるのに対して, 古くは文語 (literary language; written language) などでは, "It looks as if it's going to rain." というが如きで, 今日のアメリカ口語英語はだらだらと間延びした, 回りくどい, はぎれの悪い, パンチのきかない表現はあまり好まれない。どちらかという, 忌み嫌われる傾向が多分にあるように思われる。

これに関連して思い出すのは, 筆者がミシガン大学大学院に在学中に当時ウェブスター大辞典 (*Webster's Third New International Dictionary*) の執筆者の一人であったと伺っている Creative Writing (創作) のコースの担当教授 (私としたことが, 今とっさにこの場で先生の正確なお名前を思い出せない) が, Creative Writing の授業の中で, 英文作法の極意の習得に至る方法について常々言っていたことは, 現代アメリカ英語として定評のある *The New York Times* やイギリスを代表する *The London Times*, それに *Christian Science Monitor*, *Business Week*, *Newsweek*, *New Statesman* などの英米の代表的な新聞や雑誌, 及び, 特にその新聞や雑誌の署名入りのコラム記事から英文作法の技術をお手本として学び取れということであったように思う。先生は読者に胸のすくような鋭い切り込み方で複雑な時事問題をわかりやすく, 説得力のある力強い, 軽妙な筆使いで解説をしている, 無駄のない書き方を適切に御指摘されていたのではないかと思われる。先生は, よく無駄な, 回りくどい表現は絶対に避けるべきである, いやしくも誤解の恐れがなく, 論点が不鮮明とならないかぎり, 曖昧模糊とした焦点の定まらないぼやけた表現は極力避けて, 文章は出来るだけ短く, 端的に (directly), 簡潔に (briefly), 簡素な (plain), 簡明な (straightforward) 英語で書くことを心がけよということであった。この教えは今も変わることなく, 筆者の座右の銘として心に深く刻み込んでいる。

余談ながら, 筆者ごとではなはだ恐縮ではあるが, 誰でも自由に簡単に, 言わば海外観光旅行感覚気分で渡航出来る現代と違って, 日米両政府の多くの厳しい制約や審査や障害や選抜試験があってアメリカの大学に留学することが今日と比べて殊の外はるかに, 極めてむずかしく困難であった時代に, いくつかのハードルの高い厳しい倍率の筆記試験 (written

examination) やアメリカ大使館での英語運用能力を測るための英問英答の口述試験 (oral examination), 健康診断 (medical checkup) などを経て, 無事に合格して, 晴れて正式にアメリカの大学への渡航留学許可をいただき, 星雲の志を抱いて渡米することになり, 人生の, しかも青春の貴重な一時期を当時全米で各専門分野に著名な教授陣を多数擁して, 名実ともに文字どおり英語はミシガン大学と言われて名声を博し, 一世を風靡した時代に, 非常に充実したハイレベルの同大学で, 図らずも留学生生活を過ごし得る機会に恵まれたことを心から感謝し, 大変懐かしく, 嬉しく且つ誇りに思っている。当時のことを思い起こせば, しばし, 時間と空間を超越してまるでつい先日のように留学生時代の当時の情景—コマーコマが走馬燈のように思い出され, 胸にこみ上げて来るものがある。なかでも特に脳裏に去来する鮮烈なものは, 授業のたびに毎回各担当の先生方から連日, 次から次と息つく暇もなく矢継ぎ早に出される山のような課題や宿題や試験に, 精神的にも肉体的にも極度の疲労困憊してはいたものの, 夜はベットでおちおち横になってのんびり睡眠をとる時間も余裕もなく, それこそ無我夢中で, 死にものぐるいになって机にしがみついて, 毎日ほんの僅かな睡眠のために襲ってくる睡魔と戦い, 必死に歯を食いしばって耐え抜き, 寝食忘れて一心不乱に学業に没頭する日々に明け暮れたアメリカでの留学生時代が, 今になって述懐すれば何故かいとおしく, 懐かしく, 幸せに, 且つ誇りに思える。その上, 多くの著名な先生方から身に余る暖かい御指導を頂き, どんな言葉をもってしても容易に心の底から湧き上がるこの感謝の思いを十分に言い表すことが出来ないほどの, 有り難くも, 拝受した数々の尊いなににも代えがたい貴重な学恩に対して, 終生変わることのない心からの深い感謝の念で胸が一杯である。従って, ミシガン大学は筆者にとって折に触れ, ふと何気なく想起する忘れがたい心のより所であり, 大切な古里なのである。

本題に戻って, このコースの担当教授がいみじくも指摘された簡潔, 簡単, 明快さを第一義とする現代アメリカ口語英語の特徴として, “look as if” や “look as though” よりはむしろ間単で的確な勢いのある “look like” の方が言葉の趨勢として性に合い, 庶民の間で専ら, 広く珍重される傾向がある。いくつか文学作品から例を挙げると,

It would **look like** we don't have authority to make decisions on our own.

——— Sidney Howard, *Talk, talk, talk, talk*.

“When I saw him yesterday, he said he was so shrunk up and weak he didn't know if he could last much longer. He **looked like** his skin and bones couldn't shrivel much more.”

——— Erskine Caldwell, *Kneel to the Rising Sun*.

“... **Looks like** I ought to be the one who knows the most about my children.”

——— Id., *Tabacco Road*.

“What kind of a hound dog is that, anyway, Lonnie?” “**Looks like** to me it might be a ketch hound.” ——— *Ibid.*

When the first streak of day began to show we tied up to a towhead in a big bend on the Illinois side, and hacked off cottonwood branches with the hatchet, and covered up the raft with them so she **looked like** there had been a cave-in in the bank there.

———— Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*.

You **looks like** a haunt. ——— William Faulkner, *The Sound and the Fury*.

Look like now I ain't going to get to go. ——— *Ibid.*

なお、次例の“like”は“as if”の意で用いられている用例である。OED (*The Oxford English Dictionary*, sub B 6e) は“Now generally condemned as vulgar or slovenly”と記述している。また COD (*The Concise Oxford Dictionary of Current English*) もこの用法を vulgar としている。しかし Curme, *Syntax*, p. 281, はアメリカ英語では普通であると述べ、“*Like*, however, is widely used in colloquial and popular speech, since its vivid concrete force appeals to the feelings more than the colorless *as*. It is, of course, very common also in literature which reflects colloquial usage: ‘They don’t marry *like we do*’ と説明していて、更に続けて、In ordinary use the simple form *like* has entirely supplanted older *like as*, the older form now appearing only in archaic or poetic language, or in dialect. と述べている。

Just walks aroun’ **like** (= as if) he don’t see nothin’ an’ he prays some.

———— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

We’ll pretend **like** she was already broke. ——— *Ibid.*

“Le’s go in **like** you never been away. Le’s jus’ see what your ma says.”

———— *Ibid.*

“Grampa — it’s **like** he’s dead a year.” ——— *Ibid.*

Sometimes I’d pray **like** I always done. ——— *Ibid.*

“Well, he did act **like** he was drunk but it ain’t no matter now. I got to be moving along. I’ll fetch Goshen before daylight.”

———— Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*.

I said it looked to me **like** all the signs was about bad luck, and so I asked him if there warn’t any good-luck signs. ——— *Ibid.*

次の用例中の“as if~”は全く不要であるが、話し手の強い心的感情が微妙に働いてつい

スベリングの上に表れたものである。このように言葉はいつの世も常に人間感情や心理状態と深く関わっていて、これを無視しては語れないことを如実に示しているものである。次に“like as if” (= as if) の用例も併せて挙げておく。

Goodson looked him over, **like as if** (= as if) he was hunting for a lace on him that he could despise the most, then he says, “So you are the Committee of Inquiry, are you?”

—— Id., *The Man that Corrupted Hadleyburg*.

“... But the partic’larest thing of all is, as nobody took any notice on it but me, and they answered straight off ‘yes, **like as if** it had been me saying ‘Amen’] the right place, without listening to what went before.”

—— George Eliot, *Silas Marner*.

4. “say + to infinitive”

OED は1250年の旧訳聖書からの引用例を挙げているところからすると、かつてはイギリスでもかなり広く用いられた形跡がうかがえる。G. キルヒナー著『アメリカ語法辞典』, 604ページには「(英) to tell somebody ; (米) tell us to」と出ていて、不定詞の部分は、直接話法に直すと命令文に言い換えることも出来ると述べている。George O. Curme は, *Syntax*, p. 419に, “In American English it is common to say : ‘The teacher *says* (= *tells us*) to come early’ (or *that we must come* early).” と説明している。これに対して, *OED* は “this use of *say* for *tell* is marked obsolete. It was once literary usage in England.” とイギリスにおける語法の取り扱いの違いを明確に述べている。

He said, ‘He **say to tell you** (= He told me to tell you that) wood and hay kin’

—— William Faulkner, *Barn Burning*.

Uncle Maury **said to not let** (= told me not to let) anybody see us, so we better stoop over, Caddy said.

—— *The Sound and the Fury*.

A man sitting in a chair tilted in the broad low door, where a dark cool breeze of ammonia blew among the ranked stalls, **said to look at** the post office.

—— *Ibid.*

“Dru **says to come on** out doors if you want to hear them passing,” he whispered.

—— Id., *The Unvanquished*.

“Mamma **says to come on** to supper,” the boy said.

—— Id., *Spotted Horses*.

Virgie **said to tie** it to the tooth and tie the other end to the doorknob and shut the door real suddenly.”

—— Carson McCullers, *A Domestic Dilemma*.

“He **says not to tell** nobody.” ——— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.
Say me to drive, an’ Rosasharn an’ Connie and Granma. ——— *Ibid.*
 If anybody **says to come** dance — why, I’ll say you ain’t strong enough.
 ——— *Ibid.*

5. “say + Bare Infinitive”

時には“say”の後に“to”のつかない不定詞(Bare Infinitive)がくることもある。

“Al, Ma’s dishin’ up stew. She **says come** git it.”
 ——— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.
 Reason I **says buy** her is she was a pop’lar car. ——— *Ibid.*
 “Ma **said tell** you she’s got no catching disease.”
 ——— James Still, *River of Earth*.
 “Well, father **said go** around to the back door here.”
 ——— Paul Green, *The Body the Earth*.

6. 省 略

古い時代にはイギリスでも“to”のつかない不定詞が用いられた。その頃の名残である。Bergen and Cornelia Evans (*A Dictionary of Contemporary American Usage*), p. 243, は“to”のつかない不定詞について, “In Modern English the infinitive without *to* is used after *do, let*, and the regular auxiliary verbs such as *will, can, must*; after *bid, dare, feel, hear, make, need, see*, in the active voice but not in the passive; in certain constructions or with certain senses of the word after *have, help, find, come, go, run, try*, and occasionally after other verbs meaning ‘see, such as *behold, mark, observe*.”と非常に詳しく述べている。

Poter G. Perrin (*Writer’s Guide and Index to English*), p. 630, は“come and do”(「～しに来る」), “go and do”(「～しに行く」)の方が“come to do”や“go to do”よりも強意であると述べている。小西友七著『アメリカ英語の語法』, 87ページには「イギリスではこの種のtoの省略は, 犬にむかってGo fetch!(取ってこい)とか, 人にはOh, let it go hang!(放っておけ)と言った様な決まり文句に使われるのみで, 一般には, 特別な場合を除いてほとんど姿を消したとみてよい。……このような“to”の省略によって, 動名詞の前の前置詞の省略の場合と同様に, 原形不定詞が副詞的に用いられているとみられる。かつ, 定形動詞と直結することによって, 一般的に, 直截的に, 即物的で, 有無を言わせぬ断固たる語感がこもるようである。したがって, 特に命令文でこのまれる。」と詳しく説明している。

また大塚高信著『シェイクスピア及び聖書の英語』, (71ページ)には「運動を示す動詞の

後では、シェイクスピアや聖書の英語では“and”も“to”も使わない」と記されている。

Will you **go see** the order of the course?

—— William Shakespeare, *Julius Caesar*, I. ii. 25.

Look you, I'll **go pray**.

—— *Hamlet*, I. v. 132.

Quick, quick! We'll **come dress** you straight. Put on the gown the while.

—— *The Merry Wives of Windsor*, IV. ii. 84-5.

I sent for you when there were matters against you for your life, to **come speak** with me.

—— *2 Henry IV*, I. ii. 151-2.

またコミュニケーションの上で、大きな誤解やまぎらわしさの恐れがない限り、不定詞の“to”や接続詞の“and”を思い切って省略することにより、言葉の言語的節儉 (linguistic economy) から言って、表現上聞き手に緊張感と注意を喚起して、ひいては文全体そのものに力強さときびきびした引き締まった躍動感を感じさせる効果が伝わってくるように思われる。

6-1 “come see” (= come and see, come to see)

“**Come see** me when you come to town, Mr. Buford,” she called, as though to an old friend, and still Chad was dumb, though he lifted his hat gravely.

—— John Fox, Jr., *The Little Shepherd of Kingdom Come*.

“**Come save** me, Sammy boy! . . .”

—— George Sessions Perry, *Hold Autumn in your Hand*.

Pull down a little jigger an' the water comes right in the toilet, an' they an't no cops let to **come look** in your tent any time they want, an' the fella runs the camp is so polite, comes a-visitin' an' talks an' ain't high an' mighty.

—— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

“Al, Ma's dishin' up stew. She says **come git** it.”

—— *Ibid.*

“All right. Supper 's ready now. You can **come eat**.”

—— Helen Reimensnyder Martin, *Tillie: A Mennonite Maid*.

6-2 “go find” (= go and find, go to find)

1611年出版された万人の書とも言うべき欽定訳聖書 (*The Authorized Version of the Bible*) の中にこの語の使用例が認められる。下記2例はいずれも市川三喜著『聖書の英

語』64ページからの引用である。

Go tell my brethren that they go into Galilee. ——— xxviii. 10.

Son, go work to day in my vineyard. ——— xxi. 28.

次にアメリカの作家の作品からも使用例を挙げておく。

“Brother, go find your brother!”

———— Mark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer*.

Well, don't take my word. Go see for yourself.

———— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

And granma raised a shrill voice, “Preacher? You got a preacher? Go git him. We'll have a grace.” ——— *Ibid*.

“You better go take a good long sleep,” he said. ——— *Ibid*.

“Well, I must go make supper now. You just make yourself at home that way.”

———— Helen Reimensnyder Martin, *Tillie: A Mennonite Maid*.

“Wilson turned to Casy. Sairy want you should go see her.” “You better go take a good long sleep,” he said. ——— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

6-3 “mean tell”

本来“to-infinitive”を用いるべきところに、俗語や方言では“mean”の後に“to”を省略した言い方をする。これは古くはイギリスで“go, come”の後では“to”がつかない不定詞がよく用いられたことの今に残る名残と思われる。

You mean tell me dat nigger's graduatin'?

———— Eugene O'Neill, *All God's Chillun Got Wings*.

“I mean love him.”

———— James Still, *Salvatiion on a String*.

6-4 その他の類似表現

“Will some of you help get her back to her tent?”

———— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

“No, Tom. Don't try fool me. I'm all alone here.” ——— *Ibid*.

His name was Colonel Buford, and the old man knew where he was buried, for he

himself was old enough at the time to **help bury** him.

—— John Fox, Jr., *The Little Shepherd of Kingdom Come*.

“... And some I've **helped lay** out on the cooling-board, just as some day somebody will have to help lay me out and bring me here to sleep at the last.”

—— Paul Green, *Dog on the Sun*.

尚、次例は清水護編『英文法辞典』、57ページからの引用で、主として親が子供に向かって言う場合に使われると説明されている。

Run help your grandmother.

You can **run get** me a spoon.

6-5 “hear say, hear tell”

「～について（～のことを）」人づてに（うわさで）聞いている」の意であるが、“hear”の目的語である“people”や“someone”が省略された言い方である。OEDも“by ellipsis of such objects as *people, some one*, before the infinitives *say, speak, tell, talk*, the phrases to hear say, hear tell, etc., of which some are still in dialectal or colloquial, and occasionally literary use.”と説明している。古くは1611年に出版された欽定訳聖書（*The Authorized Version of the Bible*）やイギリスが生んだ世界的劇作家・詩人のシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の作品の中に“hear say, hear tell”の使用例が見られる。例を挙げておこう。

And Pharaoh said unto Joseph, I have dreamed a dream, and there is none that can interpret it: and I have **heard say** of thee, that thou canst understand a dream to interpret it. ——— *Genesis*, XLI. xv.

I **hear say** you are of honourable parts

And are the Governor of this place.

—— William Shakespeare, *Pericles*, IV. vi. 86-7.

She cannot endure to **hear tell** of a husband.

—— *Much Ado about Nothing*, II. i. 362.

英米の文学作品からも使用例を挙げると、

We **heard tell** as (= We heard people tell that) he'd sold his own land to come and take the Warrens, and that seemed odd for a man as had land of his own, to come and rent a farm in a strange place. ——— George Eliot, *Silas Marner*.

Hear tell they're kind of rough, but real pleasant.

———— Sidney Howard, *Ned McCobb's Daughter*.

Well, I've always **heard tell** that there was two kinds of old maids — n' consarned old maids — an' I guess you're one of the last sort.

———— Mary E. Wilkins, *A Humble Romance and Other Stories*.

I never **heard tell** o' that place. Be it far from here?

———— Lula Vollme, *Sun-Up*.

6-6 疑問詞の後の“be”動詞はよく省略される

“What (are) you sayin' to me?”

———— Helen Reimensnyder Martin, *Tillie: A Mennonite Maid*.

“What (are) you doing here? I said,” Mr.

———— Paul Green, *The Body the Earth*.

“Where (are) you from?” Alvin queried.

———— *Ibid.*

“Where (are) yuh goin' out in Bensonhoist?”

———— Thomas Wolfe, *From Death to Morning*.

Who (is) that man?

———— Paul Green, *In the Valley and Other Carolina Plays*.

“How (are) you feeling?”

———— Id., *This Body the Earth*.

“How old (are) you?”

———— Emmett Gowen, *Mountain Born*.

6-7 疑問詞の後では助動詞“do, have, will, did”がよく省略される

“What (do) ye want?” demanded the old man, who had not slept, but waited for this result.

———— Rose Terry Cooke, *Huckleberries Gathered from New England Hills*.

“Where (have) you been, anyhow? I (have) been here quite a spell.”

———— Emmet Gowen, *Mountain Born*.

“Then you'll know how to wake her,” said Laurel. “When (will) you take it up. Do you mind?”

———— Eudora Welty, *The Optimist's Daughter*.

“Where (did) you come from?” Sam Ewart asked, looking in at the door.

—— Maristan Chapman, *Homeplace*.

6-8 “see can (kin) you” (= see if you can)

‘Now, git in that water and play and **see can you** stop that slobbering and moaning.’

—— William Faulkner, *The Sound and the Fury*.

‘And **see kin you** keep fum messin up his clothes one time,’ she said, handing Luster a spoon. —— *Ibid.*

6-9 “be going to~” の代わりに “be to~” を用いることが多い

‘What’s **to** stop us?’ Michael asked “What party intends to prevent me from seeing my wife alone on Sunday? What party?”

—— Irwin Shaw, *The Girls in their Summer Dresses*.

6-10 “be + 原形不定詞”

文中で“to”のつかない形で用いられる不定詞のことを言う。特に“be”動詞の主格補語として用いられる場合に見られる。即ち，“to-infinitive”がPredicativeに用いられる場合に“to”が省略される。分かりやすく言うと，“be”動詞の補語に用いた不定詞の“to”が省略されることが多い。しかし、下記の例のように、中には省略されないで残っている、即ち、toつきの不定詞(To-Infinitive)の例も散見される。

古くは諺や1611年、英国王James 1世(1566-1625)のもとで発行された万人の書ともいふべき聖書(*The Authorized Version of the Bible*)やイギリスの劇作家・詩人のWilliam Shakespeareの作品の中にこの語法の使用例が見られる。

To-Infinitive の例

To see **is to** believe. (= Seeing is believing, 諺)

And they went every one straight forward: whither the spirit **was to** go, they went; and they turned not when they went. —— *Ezekiel*, I. 12.

My way **is** now **to** hie home to his house.

—— William Shakespeare, *The Comedy of Errors*, IV. iii. 93.

The mode of founding a college **is**, commonly, **to** get up a subscription of dollars and cents, and then following blindly the principles of a division of labour to its extreme, — a principle which should never be followed but with circumspection, — **to** call in a contractor, who makes this a subject of speculation, and he employs Irishmen or other

operatives actually to lay the foundations, while the students that are to be are said to be fitting themselves for it; and for these oversights successive generations have to pay.

—— Henry David Thoreau, *Walden*.

この語法に関する起源について、Curme (*Syntax*, pp. 5-6) は, “The prepositional infinitive, in older English also the simple infinitive: ‘To know my deed, ’t were best not *know* myself” (*Macbeth*, ii. i. 73) The use of the simple infinitive is still common in old saws. . . In popular Irish English, the simple infinitive is here still well preserved, so that it is still quite common.” と述べて、歴史的には古くからある語法であると説いている。しかし小西友七著『アメリカ英語の語法』, 89ページには, 「これは本来はアメリカ口語の特徴であったが, help の場合と同じようにイギリスにも逆輸入され, いまはつぎのように学術論文にも見られるくらいまで浸透している」と述べ, 次のような事例を一例挙げている。

All we want to do **is talk** clearly and consistently about grammatical contrasts which we have noted. ——— D. Crystal & D. Davy, *Investigating English Style*.

しかし, なるほど, この構文はアメリカ現代口語英語の特徴の1つであると言われているが, 決してアメリカ起源でも, アメリカ特有の語法でもなく, 上掲の Curme の説明にもあるように, イギリスでも古くから文学作品などに見られる語法である。特に「シェイクスピア時代には“to”のついた形と“to”のつかない形とが, 並び用いられたことは今日の英語と変わらない」と, 大塚高信著『シェイクスピア及聖書の英語』, 143ページに記述されている。そこで, 17世紀や19世紀のイギリスを代表する William Shakespeare (1564-1616) 及び Charles Dickens (1812-70) の作品などから使用例を挙げておこう。

Without To-Infinitive の例

My life **is run** his compass. Sirrah, what news?

—— William Shakespeare, *Julius Caesar*, V. III. 25.

By yea and nay, sir,

I dare say my cousin William **is become** a good scholar. He is at Oxford still, is he not?

—— Id., *Henry IV, Part II*. III. ii. 10-12.

All he has got to do **is keep** on turning as he runs away.

—— Charles Dickens, *Dombey and Son*.

アメリカの作家の作品からも用例を挙げておく。

All we needed to do **was see** the signs on the fences and in the empty store windows to start going to the dogs and neglecting our educations.

—— William Saroyan, *The Saroyan Special*.

Well, my uncle said, the first thing I'm going to do **is hire** some Mexicans and put them to work.

—— *Ibid.*

“You can't jail him,” the deputy said. “He hasn't done anything. Only thing you can do **is put** him under bond to keep the peace.”

—— John Steinbeck, *The Pastures of Heaven*.

All we got to do **is give** a yell an' they's two hundred men out.

—— *Ibid.*

The best he can do **is dodge** and **run** away from Yankees.

—— William Faulkner, *The Unvanquished*.

6-11 “see that”(= see to it that) 「きつと～になるようにする, 取りはからう, 配慮する」の意

You're going to be a great man some day, too — if you live. So **see that** you live.

—— William Saroyan, *The Human Comedy*.

7. 助動詞と否定語 “not” の位置関係

7-1 “don't need”(= need not)

助動詞 “need” 「～する必要がある」は否定文、疑問文に多く、純然たる肯定文には用いないのが原則である、と大塚高信編『新英文法辞典』、651ページに記されている。小西友七著『現代英語の文法と背景』の中で、162ページの「Notの射程」という見だし項目のもとに、「現代のように否定語を前におくようになったことは大進歩というべきであろう」と述べ、M. M. Bryantの *Psychology of English* から引用して、「英語の否定語が前位をとった背後には、敬語意識が働いている。自分の考えを早く相手に伝えて安心させようとする限りにおいて、確かに一面の真理を伝えたものと言わなくてはならないだろう」と記述している。実は筆者も人間の脳裏や胸の奥深くにある深層心理として、揺れ動く微妙な心理的感情が働いて無意識的に相手に早くはっきりと伝えるために “not” をいち早く前位置に置いたものであるように、常々感じている次第である。

また小西友七著『現代英語の文法と背景』、36ページに、「needは肯定文では He needs to be told だが、否定文では He need not to be told となる。しかし、その否定文の場合でも He

does not need to be told.とも言う」と、述べている。一般動詞感覚ですべからく“don't”を前につけるこの傾向は、特にアメリカの口語英語に共通して見られる言語現象で、正用法の“need not”よりも“don't need”のほうが今日多用されている。一般的には、明確に文意を否定したいと強く意識する余り、また相手にその真意を気持ちの上でいち早く正確に伝えたいと願う余り、否定語“not”が無意識的に自然と一般動詞感覚で“need”の前につけるようになったものであるように思われる。しかし小西友七編『現代英語語法辞典』, 745ページには、「一般的な陳述を表す場合には」needn'tよりもdon't needという。ただし、文脈によってはneedn'tを使うと話しての権限が強く現れすぎると感じられる場合があり、そのときは主観性を表す文脈でも「控えめ表現」としてdon't needが用いられると、心理的な面から説明している。

I've knowed some that **don't need** no flatirons and rollin' pins, Alice's husband said.
 —— William Faulkner, *The Wising Tree*.

7-2 “had not better”(= had better not)

忠告や提案を意味して、「～したほうがよい」の意を表す“had better”は1つのまとまった成句であるので、あとにくる動詞は常に原形であり、その否定形は“had better not～”(～しない方がよい)が正用法である。しかしアメリカ英語の口語や俗語・方言では、相手に明確に非難や後悔を表して、「～でない、～すべきではなかった」などという時の否定助動詞は話し手の強い心理が無意識のうちに働いて必然的に否定語“not”が前に出て“had not better～”という表現形式をとる傾向がどうしても強くなる。また上本明著『現代英語の用法』, 155ページに述べられているように、「had betterはアメリカの口語英語では、shouldやought toの代用となるほど、なかば助動詞化している」ということも多分に“not”が前位置をとって心理的にも“had not better”となる最大の文法的要因が潜んでいるように思う。

You **had better not** go at once. —— Heigo Akiyama, *Studies in Verbals*.
 The old gentleman was staring at Joe in a puzzled manner. He was wondering if he **hadn't better call** the conductor, as it was his private opinion that Joe had a shot of cocaine in him.
 —— William March, *The Little Wife*.

8. Double Modal Auxiliary (二重法助動詞)

助動詞を2つ重ねて、助動詞が結合して用いられる用法で、2つ目の助動詞は古い時代に

はそれ自体動詞として独立した語義、用法を持ち、中世英語期にはイギリスでも盛んに用いられた。現在では方言にその名残が残っている。この助動詞を重ねて用いる二重助動詞の用法は、意味上話者の動作や状態を述べる心的態度を表して、許可、能力、条件、強制、可能性などを表す用法で、特に主としてアメリカ南部方言によく見られる表現語法である。ここでは類似的な語法の例も含めて一括して述べることにする。

8-1 “must be able to” に代わって “must can” がしばしば用いられる

「～できるに違いない」の意味で、“must be able to” に代わって “must can” が用いられる。

He **must can** (= must be able to) see all the way up her.

—— Shirley Ann Grau, *The Black Prince*.

I **must not can** see. (= I must not be able to see.)

—— Frederic G. Cassidy, *Dictionary of American Regional English*, p. 743.

Well, that man **must can** do something. Then men’s toting him in.

—— *Ibid.*

次例は南部の黒人に見られる英語表現である。

Man, you **must don’t** know who I am.

—— *Ibid.*

8-2 “may be able to” に代わって “may can” が用いられる

Harold Wentworth の *American Dialect Dictionary*, p. 92, には “used instead of *be able to* after *may, might, will, (wi) ll not, (will) never*” と記述されていて、Alabama, Georgia など主としてアメリカ南部地域からの用例が数多く挙げられている。Frederic G. Cassidy (Chief Editor) and Joan Houston Hall (Associate Editor) によると、*Dictionary of American Regional English*, Vol. III, p. 538, では “Probably can or could; may or might be able to; might have been able to” と説明し、“may can and might could are almost universal” と述べている。能力や可能性の意味をこめたこの用法は主に南部や中南部地域の方言に多く見られると記述して、1985年の初出例から1994年の最終例に至るまで数多くの用例が挙げられている。下記2例は同辞典からの引用例である。

Now listen here brother; you **may can** understand

—— *Ibid.*

Go to see Mr. Smith. He **might can** tell you.

—— *Ibid.*

'You **may can** fool him,' I says. 'I won't tell on you.'

—— William Faulkner, *The Sound and the Fury*.

'I'll show you,' I says. 'You **may can** scare an old woman off, but I'll show you who's got hold of you now. —— *Ibid.*

I **might can** go.

—— Robert Hendrickson, *The Facts on File Dictionary of American Regionalisms*.

'You **might not can** (= might not be able to) come back, man,' the porter said, 'but after what you did, I swear, they never will stop talking about you. You really baptize ole Rev!' —— Ralph Ellison, *Invisible Man*.

8-3 “might be able to”にかわって“might could”がしばしば用いられる

“might”は“may”よりも婉曲的で控えめな意味内容を表す。G. キルヒナー著の『アメリカ語法辞典』, 444ページには、仮定法過去が俗語ではよく不定詞として扱われると記している。H. L. Mencken の *The American Language, Supplement Two*, p. 133, によれば、この表現形式はアメリカ南部地域の教養の低い人たちに多い表現だということである。また Albert H. Marckwardt の *American English*, p. 140, にもこの用法は“characteristic of the South”「アメリカ南部の特徴」と明言している。若田部博哉著『英語史Ⅲ』, 127ページには「南部・中部南域においては、また中部北域のうちペンシルバニア東部のドイツ系の住民の多い地域においては、might be able to (～できるかもしれない)にかわって might could が用いられている」と記述されている。

“Maybe if you could lend it to me, I **might could** make it up and pay you back.”

—— Erskine Caldwell, *Journeyman*.

I know where I **might could** make it up and pay you back. —— *Ibid.*

Favver **might could** have some horses and silver and all hid away — I would n't tell, the boy said. —— Paul Green, *Dog on the Sun*.

Course, I **might not could** resist it.

—— Crawford Feagin, *Variation And Change in Alabama English*.

They **might could** tell you where you get the whiskey.

—— Frederic G. Cassidy, *Dictionary of American Regional English*, p.538.

I **might could** get by without the one, but I can't without both.

—— Robert Hendrickson, *The Facts on File Dictionary of American Regionalisms*.

8-4 “might wouldn’t” (= might not)

“might” の否定形。

“I allowed you **might** maybe **wouldn’t** want her to come, after the way things was, and all. She’s over to Gillows’ with her sister.”

—— Emmett Gowen, *Mountain Born*.

8-5 “ought to”

アメリカ英語では、義務「～すべきだ」や推量「当然～のはずだ」などの意を表す“ought”には過去形がないために、「ought to + have + p. p.」で過去の実現されなかった義務や必要や勧告の不履行を表して（～すべきだったのに～しなかった）の意を表す。通常は否定形で（～すべきでなかった）の意で用いられる。口語や俗語・方言の否定形では、英米において、“don’t (didn’t) ought to, hadn’t ought to”ということがよくある。例えば、

Maybe I **do not ought to** have left him to begin.

—— William Faulkner, *Knight’s Gambit*.

これについて、尾上政次著『現代米語文法』、115ページには、「方言的には had (not) ought to, ought (not) to の意味に相当広く用いられている」と、述べられている。Otto Jespersen, *A Modern English Grammar*, IV. 9.8(3)には、“In vulgar English (chiefly in U. S.) the pluperfect *had (not) ought to* is often used instead of *ought (not) to*; in most, but not in all, cases it refers to an unfulfilled duty in the past, even if the perfect infinitive is not used.” と説明されている。また Albert H. Marckwardt, *American English*, p. 140, には “hadn’t ought for ‘oughtn’t’ among the oldest sector of the population” と記述され、今日でも尚この語法がアメリカ北部の年配の人たちの間では普通に用いられていると述べている。また J. L. Dillard による同書の改訂版、140ページにはより詳しく、“*hadn’t ought* is a characteristic Northern double modal; *might could* and *may can* were perhaps exclusively Southern until Black speakers carried them into the Northern cities.” と解説している。また Frederic G. Cassidy and Joan Houston Hall の *Dictionary of American Regional English*, p. 904, にもこの語法は北部では広く用いられている方言であると記述している。

“A man **had ought to** take and leave you,” he whispered.

—— Emmet Gowen, *Dark Moon of March*.

“I’d **ought to** be able to contrive of somethig Uncle Shannon said, screwing up his

eyes.” “Leave me think. Out of all the times I been arrested I’d **ought to** be able to add up a idee.”

—— Maristan Chapman, *The Weather Tree*.

“I reckon we **hadn’t ought to** a-married.”

—— Emmet Gowen, *Dark Moon of March*.

“hadn’t ought to” は「～すべきではない (ought not to～)」の意で、“must not” よりも弱い表現である。“had ought to” は一般に北部方言で広く用いられている語法である。若田部博哉著『英語史Ⅲ B』, 67ページによれば, 中・南部では一部の地域, 例えば, ノースカロライナ州東部で用いられているのみであると, 記されている。1954年に Nobel 文学賞を受賞した Ernest Hemingway (1899-1961) をして, 「すべての現代アメリカ文学はハックルベリー・フィンというマーク・トウェインの一冊の本から始まる」とまで言わしめたミズーリ州が生んだアメリカの国民的ユーモア作家, Mark Twain, 本名 Samuel Langhorne Clemens (1835-1910) を評したこの部分の触りを参考までに引用しておこう。

All modern American literature comes from one book by Mark Twain called Huckleberry Finn. If you read it you must stop where the Nigger Jim is stolen from the boys. That is the real end. The rest is just cheating. But it’s the best book we’ve had. All American writing comes from that. There was nothing before. There has been nothing as good as since.

—— Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa*.

マーク・トウェイン自身はアメリカの南北両方言を比較言及する中で “hadn’t ought” について次のような興味深いコメントを述べている。その件を引用すると,

The Northern word “guess”—imported from England, where it used to be common, and now regarded by satirical Englishmen as a Yankee original — is but little used among Southerners. They say “reckon.” They haven’t any “doesn’t” in their language; they say “don’t” instead. The unpolished often use “went” for “gone.” It is nearly as bad as the Northern “hadn’t ought.” This reminds me that a remark of a very peculiar nature was made here in my neighborhood (in the North) a few days ago: “He hadn’t ought to have went.”

—— Mark Twain, *Life on the Mississippi*.

次に文学作品からこの語法の使用例を挙げると、

Oh, Mrs. Whipple, you **hadn't ought to** let Him do that.

—— Katherine Ann Porter, *He*.

“You **hadn't ought to** spend it without astin' me dare you. Now I'm going to learn you once! Set up.”

—— Helen Reimensnyder Martin, *Tillie: A Mennonite Maid*.

Yah. He **hadn't ought to** have done Papa that way.— But it's been some peaceful without him!

—— Patterson Green, *Papa Is All*.

“ought not to have”, または “ought not to” が正用法であるが、この語法は George O. Curme, *Accidence*, (57 4 Ac) によれば、仮定法過去の助動詞 had のあとに過去形である “ought” が不定詞の感覚でおかれたものであると述べている。

“Say, that's real good of you. I'm sure he'll let me stay if you speak for me. I just won't do a thing I **didn't ought** all the time I'm here.”

—— Somerset Maugham, *Rain*.

“didn't ought” ではなくて “ought not to” が正用法。

アメリカの北部方言でよく使われる “hadn't ought to have + 過去分詞” は、標準英語で言う “ought not to have + p. p.” で「～すべきではなかったのに (～した)」, “ought to have + p. p.” は「～すべきだったのに (～しなかった)」の意味を表す。OED は hadn't ought = ought not to have. と解説して、Vulgar English と言語レベルを表記している。

Yah. He **hadn't ought to have been** (= ought not to have done) Papa that way.— But it's been some peaceful without him!

—— Patterson Green, *Papa Is All*.

この他 “ought to have + pp.” には have が欠落した例も見られる。

I'll have to take your mother on and I thought about saying, Yes you **ought to brought** two bottles instead of just one only I thought about where we were so I let them go on.

—— William Faulkner, *The Sound and the Fury*.

I forgot your coat. T. P. said. You **ought to had** it. But I ain't going back.

—— *Ibid.*

8-6 “shouldn't ought to” (= should ought not to)

Ernie and me get along fine because the both of us we're innocent men and we **shouldn't ought to** be here.

—— Laurence Treat and Charles M. Plotz, *The Good Lord Will Provide.*

“shouldn't ought to”ではなくて“should ought not to”が正用法であるがアメリカ英語では、特に俗語、方言では“ain't, don't (didn't), hadn't, shouldn't, wouldn'tをought to”の前に用いることがある。これについて、George O. Curmeは*Syntax*, p. 414で、“To convey greater assurance the common people place the present tense *do* before the old past subjunctive *ought*, and have thus created a new present subjunctive form: He *don't ought to go.*”と説明している。

8-7 “wouldn't need to wasn't” (= wouldn't need to be)

“need to”の否定形

“I'd **not need to wasn't** I all-alonesome,” he pleaded.

—— Maristan Chapman, *The Happy Mountain.*

8-8 “could t' 'ould” (= would not)

“You should a pa'tridge wi' my gun?” growled his grand-father, glowering upon him.
“Ye couldn't hol' it tu arm's len'th a secont, you hain't staout 'nough tu pull the tricker 'f you c'ld reach it, an' if ye **could 't' 'ould** kick ye int' the dle o' next week! . . .”

—— Rowland E. Robinson, *A Danvis Pioneer.*

8-9 “don't was been” (= haven't been)

“Ah. Onc' Lisha! You pooty bad hole man. Haow you feel dat time you tink you dead? Wha' you tink you go? A'nt you sorry you **don't was been** mo' gooder? Wha' you tink you go, hein?”

—— Samuel Slick, *Uncle Lisha's Shop: A Life in a Corner of Yankeeland.*

8-10 “didn’t used to” (= used not to)

習慣的な動作を表す「used to + 動詞の原形」は過去の習慣や状態を表して、「いつも～していた、～していたものだ」の意を表す。“used to”の否定形は“used not to infinitive”で、疑問形には通常“do”を用いないが、口語や俗語・方言では前に‘did not’をつけて、“didn’t used to infinitive”を用いることが多い。しかし小西友七編『現代英語語法辞典』、1148ページによれば、否定文の I didn’t use to walk to work. は口語的であり、I used not to walk to work. は堅苦しいと述べている。これに対して、Porter G. Perrin の *Writer’s Guide and Index to English*, p. 875, には、“The negative construction didn’t use to, used not to, etc.” are common in speech but are rarely found in print.”と記述されている。また Bergen Evans and Cornelia Evans の *A Dictionary of Contemporary American Usage*, p. 533, には、“In the United States, questions and negative statements involving *used to* require the word *did*, as in *did there use to be owls here?*, *he didn’t use to drink*, *didn’t you use to like her?* In Great Britain, the auxiliary *did* is never used and these American constructions are generally condemned. Englishmen say *used there to be owls here?* *he usen’t to drink*, and *usen’t you to like her*. The negative statement *he used not drink* is acceptable in both countries.”とある。また同著者の *A Dictionary of Contemporary American Usage*, p. 533, にも同様に、アメリカでは一般動詞なみに“did”を用いて、“Did he use to...?/ He didn’t use to...”という。以前にはイギリスでは“used to”の疑問や否定に“did”を用いることはなかった。その当時の頃の様子は、Otto Jespersen, *A Modern English Grammar*, IV, p. 14, に記載されているごとくイギリスではそのような英語に対して常に厳しい非難の対象であった。

... and she (American lady) preferred “he didn’t use to smoke” to “he usedn’t to smoke”, which she (English lady) declared “childish, no grown-up person in America would say so”, while my English friends say that he usedn’t to smoke is better than he didn’t used to smoke.

——— Otto Jespersen, *A Modern English Grammar*.

しかし、現在ではアメリカ同様にこの語法は一般にイギリスでも広く認められている。筆者がこよなく常に愛用している *COD* の p. 1410, にこの語の語法レベルとして、“colloquial, *didn’t use*” という解説がつけられていることにもそのことがはっきりと認められる。また Bergen and Cornelia Evans の *A Dictionary of Contemporary Usage*, p. 533, には、In the United States, questions and negative statements involving *used to* require the word *did*, as in *did there use to be owls here?*, *he didn’t use to drink*, *didn’t you use to like her?* In Great

Britain, the auxiliary *did* is never used and these American constructions are generally condemned. Englishmen say *used there to be owls here?, he usen't to drink, and usen't you like her?* The negative statement *he used not to drink* is acceptable in both countries. *Used to* may follow *had*, as in *where they had used to be*, but this is an extremely literary construction. In everyday speech we say merely *where they used to be*. *Used to* cannot follow a subjunctive auxiliary. Sentences such as *I couldn't used to* are sometimes heard but are not considered acceptable.”と詳しく英米の語法についても述べられている。文学作品から一例を挙げると、

Didn't use to (= He usedn't to) be bluegum, neither.

—— William Faulkner, *The Sound and the Fury*.

尚、次の構文は、G. キルヒナー『アメリカ語法辞典』444ページによればアメリカ西部や南部の俗語であるとしている。また *OED* (can v. 7) は “used to could” はイングランドやアメリカの幾つかの方言で “used to be able” の代わりに用いられると述べ、1413年の初例に始まり1940年を最終例としている。

He **used to could** play the fiddle.

—— Truman Capote, *Other Voices, Other Rooms*.

I can't do the hard day's work I **used to could**.

—— Erskine Caldwell, *House in the Upland*.

大塚高信編『英語慣用法辞典』、1160ページには、Whitford & Foster の *Concise Dictionary of American Grammar and Usage* から引用して “used to be able to” というべきところを “used to could” というのは俗語であるとしている。この “used to could” の語法は Otto Jespersen, *Modern English Grammar*, IV, 22. (4) p. 371, によれば、(= used to be unable to...) の意で、イギリスの Lancashire 地方で用いられている方言であると明記している。この語法が移住者とともにイギリスからはるばる海を越えて新大陸に渡ってきて、アメリカ社会に深く根をおろして現代も庶民の間で広く用いられているものである。Harold Wentworth の *American Dialect Dictionary*, p. 679, には中南部の Mississippi, Tennessee, Kansas, 北部の Michigan, 北東部の New England, New York, 南部の North Carolina, 南西部の Texas など西部の California を除くほぼ全州から数多くの用例が挙げられている。

8-11 “used to did” (= used to do)

長期にわたる過去の習慣や状態を表す用法であるが、過去のことを殊更強く意識し過ぎて、即ち過去に対する思いが過剰意識となって働いて“do”であるべきところが、心理的な一面を反映して“did”になってしまったアメリカ南部方言に見られる表現語法である。

“In course I do,” sais Loyalist, “in course I do,” sais he, “that is,” sais he, “I **used to did** to speak it at Long Island, but that’s a long time ago. . .”

—— Thomas Chandler Haliburton, *The Attaché; or, Sam Slick in England*.

8-12 “used to was” (= used to be)

Then she got to talking about her husband, and about her relations up the river, and her relations down the river, and about how much better off they **used to was**, and how they didn’t know but they’d made a mistake coming to our town, instead of letting well alone — and so on and so on, till I was afeard I had made mistake coming to her to find out what was going on in the town;

—— Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*.

He ain’t s popular now as he **used to was**.

—— Id., *Tom Sawyer, Detective*.

9. 二重前置詞 (Double Preposition)

前置詞を2つ重ねて用いる用法で、George O. Curme (*Syntax*, p. 560) は、“A rat ran out from under the stable’ *from* was originally a preposition governing the pepositional phrase *under the stable*, but we now feel *from under* as a compound preposition in which *under* indicates a position and *from* a movement from that position.”と説明している。即ち、Curmeによると、“from under”は1つの複合前置詞と考え、そして“under”は位置を示し、“from”はその位置からの運動を示していると、とらえているのである。類例を含めいくつか使用例を挙げておこう。

Christ, if I had fifty trailers **at under** a hundred I’d clean up.

—— Hamlin Garland, *Main-Travelled Roads*.

At about four o’clock in California it became the stylish thing for school nurses to visit the classes and to catechize the chuildren on intimate details of their home life.

—— Id., *Tortilla Flat*.

At about four o'clock he stood up, stretche and sauntered of his yard, toward Monterey. ——— *Ibid.*

An' fruit ever'place, an' people just bein' in the nicest places, little houses **in among** the orange trees. ——— John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

And **in behind** them was some unknown thing.

——— Id., *The Red Pony*.

"All but Connie an' Rosasharn. They went off to sleep in the open. Says it's too warm **in under** cover." ——— Id., *The Grapes of Wrath*.

From behind her Al growed, "God Almighty, Mae, give 'em bread."

——— *Ibid.*

From inside the restaurant the truck drivers and Mae and Al stared after them.

——— *Ibid.*

He pulled a little bag **from under** the counter, whipped it open and scooped some sugar into it, weighed the bag, and added a little more sugar.

——— *Ibid.*

From behind her Al growed, "Good Almighty, Mae, give 'em bread."

——— *Ibid.*

From inside the restaurant the truck drivers and Mae and Al stared after them.

——— *Ibid.*

Tom moved Ma from the seat and got the can of tire patch **from underneath** the cushion. ——— *Ibid.*

"All but Connie an' Rosasharn. They went off to sleep in the open. Says it's too warm **in under** cover." ——— *Ibid.*

And **in behind** them was some unknown thing.

——— Id., *The Red Pony*.

参考文献

- 荒木一雄他 (1982) 『新英語学辞典』 研究社出版。
 安藤貞雄 (1959) 『英語語法研究』 研究社出版。
 石橋幸太郎他 (1972) 『現代英語学事典』 成美堂。
 市川三喜 (1954) 『英文法研究』 研究社出版。
 ——編 (1955) 『英語学辞典』 研究社出版。
 —— (1967) 『聖書の英語』 研究社出版。
 井上義昌 (1960) 『英米語用法辞典』 開拓社。

- (1966) 『詳解英文法辞典』 開拓社。
- 上本明 (1972) 『現代英語の用法』 研究社出版。
- 大塚高信 (1951) 『シェイクスピア及聖書の英語』 研究社出版。
- (1958) 『英文法論考』 研究社出版。
- 編 (1961) 『英語慣用法辞典』 三省堂。
- 編 (1970) 『新英文法辞典』 三省堂。
- 大橋栄三 (1969) *Huckleberry Finn* 研究社出版。
- 尾上政次 (1957) 『現代米語文法』 研究社出版。
- 貴志謙二訳 (1946) 『カーム英文法』 篠崎書林。
- 後藤弘樹 (1993) 『Mark Twain のミズーリ方言の研究』 中央大学出版部。
- (1998) 『アメリカ英語方言の語彙の歴史的研究』 中央大学出版部。
- (2004) 『アメリカ北部英語方言の研究』 双魚舎。
- (2005) 『アメリカ中部方言の研究』 私家版。
- (2007) 『アメリカ北部方言の研究』 改訂版 (私家版)。
- (2007) 『アメリカ南部方言の研究』 私家版。
- (2010) 『アメリカ西部方言の研究』 私家版。
- 小西友七 (1977) 『現代英語の文法と背景』 研究社出版。
- (1982) 『アメリカ英語の語法』 研究社出版。
- (2006) 『現代英語語法辞典』 三省堂。
- 沢田敬也 (1984) 『アメリカ文学方言辞典』 オセアニア出版。
- 清水護編 (1973) 『英文法辞典』 培風館。
- 杉山忠一 (1998) 『英文法詳解』 学習研究社。
- 竹林滋他 (2002) 『新英和大辞典』 第六版 研究社出版。
- 中島文雄編 (1969) 『岩波英和大辞典』 岩波書店。
- 藤井健三 (1996) 『アメリカ文学言語辞典』 中央大学出版。
- 船橋雄 (1931) *The Bible* 研究社出版。
- 堀内克明編 (1999) 『新英和中辞典』 旺文社。
- 前島儀一郎他共訳 (1983) 『アメリカ語法事典』 大修館書店。
- 松波有他 (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店。
- 若田部博哉 (1985) 『英語学大系』 IIIB 大修館書店。
- 渡貫陽他 (2000) 『徹底例解ロイヤル英文法』 旺文社。
- Bartlett, John Russell (1859), *Dictionary of Americanisms*, Boston: Little, Brown and Company.
- (1894), *A Complete Concordance to Shakespeare*, Mass: Macmillan St. Martin's Press.
- Cassidy, Frederic G. and Joan Houston Hall (1996), *Dictionary of American Regional English*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Curme, George O. (1931), *Syntax*, Boston: D. C. Heath And Company.
- (1935), *Parts of Speech and Accidence*, Boston: Heath.
- Evans, Bergen and Cornelia Evans (1957), *A Dictionary of Contemporary American Usage*, New York: Random House.
- Flexner, Stuart Berg (1976), *I Hear America Talking*, New York: Van Nostrand Reinhold Company.
- Follett, Wilson (1966), *Modern American Usage*, New York: Hill & Wang.
- Fowler, H. W. (1952), *A Dictionary of Modern American Usage*, Oxford: At The Clarendon Press.

- (1965), *A Dictionary of Modern English Usage*, Oxford: Oxford University Press.
- Fowler, H. W. and F. G. Fowler (1956), *The Concise Oxford Dictionary of Current English*, Oxford: At The Clarendon Press.
- Harrison, G. B. Edited (1952), *Shakespeare: The Complete Works*, New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Hendrickson, Robert (2000), *The Facts on File Dictionary of American Regionalisms*, New York: Facts On File, Inc.
- Jespersen, Otto (1965) *A Modern English Grammar*, London: George Allen & Unwin Ltd.
- Marckwardt, Albert H. (1958), *American English*, New York: Oxford University Press.
- Revised by J. L. Dillard (1980), *American English*, New York: Oxford University Press.
- Mencken, H. L. (1936), *The American Language*, New York: Alfred A. Knopf.
- (1945), *The American Language: Supplement one*, New York: Alfred Knopf.
- (1948), *The American Language: Supplement two*, New York: Alfred Knopf.
- Murray, James A. H. & Others (1970), *The Oxford English Dictionary*, Oxford: The Clarendon Press.
- Nicholson, Margaret (1957), *A Dictionary of American English Usage*, New York: Oxford University Press.
- Partridge, E. (1948), *Usage And Abusage*, London: Hamilton.
- (1951), *A Dictionary of Slang and Unconventional English*, London: Routledge.
- Perrin, Porter G. (1965), *Writer's Guide and Index to English*, Chicago: Scott, Foresman and Company.
- Ramsay, Robert L. and Frances G. Emberson (1963), *A Mark Twain Lexicon*, New York: Russell & Russell, Inc.
- Reed, C. E. (1967), *Dialects of American English*, Ohio: The World Publishing Company.
- Wentworth, H. (1944), *American Dialect Dictionary*, New York: Thomas Y. Crowell Company.
- Wright, Joseph (1970), *The English Dialect Dictionary*, Norwich: Fletcher & Son Ltd.